10) 体外衝撃波結石破砕療法が有効であった confluence stone の1例

後藤 俊夫・関根 厚雄 (新潟県立吉田病院 内科)
朴 鐘千

症例は，40才，女性．人間ドックにて，胆嚢結石を指摘され，1992年10月20日初診．腹部エコー，CT では，胆嚢は萎縮しており，胆嚢内に結石がみられた．ERCP では，胆嚢内には造影剤がはいらず，胆嚢管にて閉塞していた．腹腔鏡下胆嚢摘出術を予定していたが，1992年11月26日より，心窩部痛，黄疸あり，11月30日入院．ERCP にて，径 12×10 mm の confluence stone と診断し，乳頭切開後，7Fr，ENBD を挿入した．体外衝撃波結石破砕装置 TRIPTER X-1 を用いて，ENBD チューブから造影し，X線ガイド下に2,000発の衝撃波を照射した．結石は破砕され，後日 ERCP にて，排石を確認した．我々は，総胆管結石に対しての ESWL の有効性を報告してきたが，破砕効果は結石の種類のみならず，結石と胆管壁との胆汁が存在するスペースの大小が問題となる．confluence stone は，結石と胆管壁とのスペースが小さく，破砕困難と思われたが，ドレナージより造影剤を十分に注入し，破砕に成功した．

11) 胆石イレウスの1例

阿部 要一・吉田真佐人
榊原 年宏 (木戸病院外科)
秋山 修宏・藤井 久一 (同 内科)

胆石イレウスは比較的稀な疾患とされてきたが，最近その報告例が少しずつ増加しつつあり，本邦では1903年以降300例余りが報告されています．我々は術前に診断できた本症の1例を経験した．症例は66歳，男性，腹痛，嘔吐，入院時腹部X線検査にて胆道内ガス像，腸管拡張像，腸管内結石像が認められ，腹部 CT 所見では胆嚢壁の肥厚と胆嚢および胆道内にガス像を認めた．十二指腸内視鏡検査で十二指腸乳頭の口側，SDA 直下に瘻孔を認めた．胆石イレウスの診断で開腹し，Treitz 靭帯から約 150 cm の空腸に嵌頓する2個の結石を認め，腸切開して摘出し，さらに胆嚢部分切除，胆嚢十二指腸瘻の閉鎖術を一期的に施行した．2個の結石の大きさは 3.2×3.0×2.8 cm，2.2×2.0×2.0 cm で結石分析ではコレステロール結石でした．術後しばらく胆汁の漏出を認めたが，自然閉鎖し，全治退院した．

12) 超常磁性酸化鉄を用いた造影 MRI による肝腫瘤性病変の描出能の検討

加村 毅・木村 元政
酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)
塚田 一博 (同 第一外科)
市田 隆文 (同 第三内科)
武田 敬子 (済生会新潟第二病院放射線科)
尾崎 俊彦・太田 宏信 (同 内科)

新しい肝の MRI 用造影剤である超常磁性酸化鉄 (superparamagnetic iron oxide: AMI-25) を肝細胞癌9例，胆管細胞癌1例，転移性肝癌9例の合計19例に投与した．AMI-25 投与により，Contrast to Noise Ratio (CNR) は向上した．切除ないし生検にて診断が確定した10例14結節について検出できた病変数をみると，転移性肝癌9結節では AMI-25 による造影前・後とも8結節を描出し得たが，描出された sequence の数は造影後が多かった．また US で描出されたのは6結節，CT では7結節であり，これらより多くの結節を描出しえた．肝細胞癌5結節中，血管造影で濃染され，組織学的に中分化の肝細胞癌3結節は AMI-25 による造影前・後とも良好に描出されたが，血管造影で濃染のない高分化肝細胞癌2結節はいずれも造影後かえって不明瞭になった．転移性肝癌の検出目的で MRI を行う場合，AMI-25 による造影は有用と思われた．肝細胞癌については，分化度の判断の一助となると思われた．

13) 保存的治療により軽快した胆摘術後胆汁性腹水の1例

河内 保之・岡村 直孝
羽賀 学・若桑 隆二
広田 雅行・田島 健三 (長岡赤十字病院 外科)
和田 寛治

胆道系手術術後は外傷などにより胆道損傷があった場合，腹腔内に漏出した胆汁は通常胆汁性腹膜炎を引き起すが，希に大量の胆汁漏出があるにもかかわらず，急性症状を欠くことがある．このような状態を胆汁性腹水と呼ぶ．

今回，我々が経験した症例は胆嚢摘出術中に総肝管損傷があったが，術後2週間は経過良好であった．しかし，術後17病日に腹腔内への胆汁漏出が明らかとなった．腹部所見および血液検査で腹膜炎の所見は認めなかったため，2回の経皮的ドレナージを行うことにより保存的に治療し軽快した．ドレナージされた胆汁性腹水の量は total 3,000 ml であった．